

Problem Solving

# Case 2



外国につながる子どもたちへの学習支援

## 友<sup>ゆう</sup>ゆうスペース

神奈川県

- |     |               |
|-----|---------------|
| 課題1 | 支援者の関わり       |
| 課題2 | 役割の設定と運営      |
| 課題3 | 資金と場の確保       |
| 課題4 | 利用者・担い手の確保と対応 |
| 課題5 | 協力ネットワーク      |

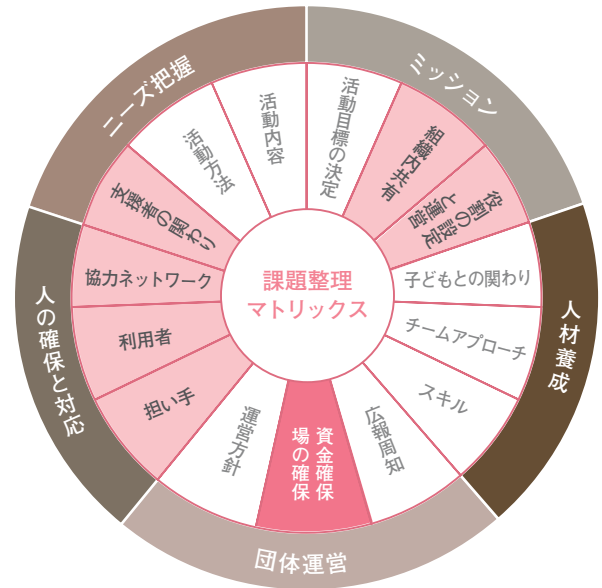
外国につながる子どもたちへの学習支援

ゆう  
友ゆうスペース

地域に多文化共生を広める



友ゆうスペースは、神奈川県内3か所で外国につながる子どもたちを対象に、日本語による学習支援を行っています。学習支援を通して子どもたちが学習への習慣や意欲を身につけるとともに、担い手であるボランティアを通じて地域に多文化共生を広めています。



この方にお聞きしました

PROFILE

塚越 恵美さん (67歳)

友ゆうスペース代表。2011年、神奈川県国際協力ネットワークと区役所が共催したボランティア講座「学習支援者養成講座」を受講。地域での多文化共生を実現することの大切さを感じ、拠点づくりの活動に参画。また、外国籍の子ども達への学習支援の必要性や楽しさを感じ、国際協力ネットワークの有志と共に、外国につながる子どもたちへの学習支援グループを立ち上げました。友ゆうスペースとして独立した後、代表を務めています。



南崎 美智子さん (51歳)

夫の転勤で、当時、小中学生の2人の子どもと共に、イギリスで生活をしました。子どもたちは、日本とは大きく環境が違う中、現地の学校の先生や地域の人たちに、お世話になり、無事に生活でき、子どもも成長することができました。帰国後、夫が初めに、友ゆうスペースのボランティアに参加し、その後、出張で活動できない時にピンチヒッターでお手伝いしたことをきっかけに活動をするようになりました。現在は、事務局およびはと友（神奈川県保険・医療・福祉複合施設）教室のコーディネーターを担当しています。



横田 和子さん (69歳)

友ゆうスペース副代表。2005年、小学校教員を退職後、神奈川大学で女性学を学ぶ。同大学の教授の勧めで2011年、神奈川大学の学生たちが主体で行っている外国籍の子ども達を対象にした学習支援の活動のアドバイザーとして活動を始めました。そのつながりで、国際交流ネットワークの活動を知り、メンバーとの繋がりもできて、友ゆうスペースの活動に参加。現在は、副代表と、小学校内教室のコーディネーターを担当しています。



背景

background

神奈川県は横浜市内でも中区、鶴見区、南区に次ぐ4番目に外国人の多い区（2019年約7000人）。横浜市では、外国人が日常生活の困りごとの相談や、外国人同士が交流する場、日本語がまだ理解できない外国人への通訳の派遣依頼ができる機関としての役割を果たす、「国際交流ラウンジ」が18区中10ヵ所（2019.3現在）整備されているが、神奈川県には整備されておらず、生活のしづらさを感じる外国人や、その子どもがいることが想定されていました。

開設年月日	2017年10月(友ゆうスペースとして独立)
スタッフ	ボランティア40名
活動内容	外国につながる子どもたちへの教科学習、日本語学習支援、夏休み宿題教室、夏休み理科教室、保護者の会、新年の会
対象	小学生(外国籍または日本国籍でも日本語を母語としない子ども)
国籍	中国(16) インドネシア(4) モンゴル(2) インド(2) ネパール(1) ロシア(1)
URL	<a href="https://yuyuspace1014.web.fc2.com/">https://yuyuspace1014.web.fc2.com/</a>

開催場所	①はーと友教室 神奈川県保健・医療・福祉複合施設「はーと友」
時期・日時	毎週土曜日 10:00～12:00(2014年4月～)
	②小学校内教室 区内小学校
	毎週水曜日 14:00～16:00(2013年4月～)
	③神大寺教室 神大寺地区センター
	毎週火曜日 15:00～17:00(2013年1月～)
参加費	無料

### 活動のきっかけ

2004年、神奈川県で活動している5つの国際交流・支援団体が連携し、区内において多文化共生の実現と国際交流の拠点が整備されることを目標に活動をはじめました。まず、区内在住の外国籍の住民の声や困りごとを知るために、聞き取りなどを進めていましたが、2011年6月、外国籍の子ども達の生活も知りたい、また、生活のしづらさについて支えになればということ、外国につながる子どもたちへの学習支援を始めました。

活動をする中で、外国につながる子どもたちが様々な課題を抱えていることが見えてきました。生活のため夜遅くまで両親が仕事をしている家庭が多いこと。自営業、特に飲食店などを営む家庭については、朝から深夜まで、両親が店にかかりきりで、子ども達の生活が、学校では言葉や文化の課題があり馴染みにくく、家でもひとりぼっちといった環境におかれていること。また、外国人の両親が日本での仕事が軌道に乗るまで、子ども達は母国で祖父母に預けられて育ち、その後、呼び寄せられたものの、両親の日本語力も脆弱なうえ、子どもへの日本語教育も行き届かず、長く、学校になじめないでいる子どもが多いことなど、様々な子どもの課題が見えてきました。

また、仕事はしているものの、保護者の日本語力の弱さに、支援がなく、子どもの通う学校での様々な行事や手続きについて、保護者が理解できないために、その子どもたちの学校生活に、更に支障が出るなどといったことが起こっていることもわかってきました。こうした外国につながる子どもたちの課題が浮き彫りになる中で、学習支援だけではなく、こうした子どもたちが安心できる居場所が必要であると考え、2017年、5つの団体のネットワークの総会で、ネットワークの一部門である学習支援部門が、独立する形で「友ゆうスペース」を設立しました。

また、ネットワークの目的としている、多文化共生の拠点整備についても、「神奈川県に多文化共生をすすめる会」として独立し活動を続けています。



### 私たちのミッション

#### 活動目標

外国につながる子どもたちへの学習支援を通して、子どもたちが安心して学校生活を送れるようになること

友ゆうスペースを利用する子どもたちの家庭は共働き家庭がほとんどです。保護者の日本語力も脆弱な場合が多く、労働時間も長く、時間や心の余裕がありません。忙しいから子どもとの関わりは少なくなり、子どもたちは、家庭でも、地域でも、学校でも孤立しがちになります。言葉の問題を残しつつ、子どもは常に不安な気持ちを持ちながらの生活が続きます。子どもにとって、自分のことを見守ってくれている人、理解してくれる人が必要です。困ったときには、安心して助けを求められる大人の存在が必要です。

友ゆうスペースでは、ボランティアが、子どもたちとの信頼関係が築けるよう、子どもたちが安心して、ボランティアに声をかけられ、困ったことが言えるようになるよう心掛けます。

学習支援活動としては、教科学習という点では、教師の資格があるボランティアもいますが多くは素人で教える力は十分とは言えないと思います。また、日本語指導の資格を持っている人も少数なので、こちらも、専門性が十分あるとは言えません。それでも、家に1人であることの多い子どもたちが楽しみに休まず来てくれます。学校ではなかなかコミュニケーションが取れない子どもでも、ここでは同じ母語の子と母語で思いっきり話せたり、ケンカをしたり、子ども同士の繋がりができます。こうして、私たちは、活動の中でミッションを果たしていこうとしています。

#### 外国につながる子どもたちを支える地域のチカラを育てたい

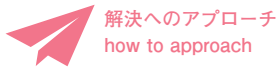
外国籍の家族が日本で生活していくことは、簡単なことではないと、学習支援活動を通して痛感しています。子どもの希望とは無関係に、小学校高学年や中学生で、日本で暮らすことになった子どもは、学習面でも難しくなっており、友人関係も幼児期とは異なる複雑さが要求されます。その中で、言葉の問題があれば、勉強への意欲も大切な友人関係さえ築けなくなり深刻です。

地域で、私たちの学習支援の場も含め、地域の様々な人から、語りかけられ、見守られていたならば、子どもたちにも、自分のことを発信するチカラ、考えるチカラが身についてくると思います。そうした経験を繰り返すことは、生きるチカラにも必ずなると思います。私たちの学習支援活動は、学力の向上にはそれほど役立つかもしれませんが、彼らを受け入れ、安心できる場として、地域の中にもあり続けたいと思っています。

## 課題1

## 支援者の関わり

### I 子どもの生活支援



学習支援をしているから気づく、必要な子どもへの生活支援

#### 具 体 策

##### ①限界があるなかで必要と感じる「食」の支援

忙しく働いている保護者が多く我が子への配慮も不十分な家庭があるのも現実です。朝ご飯を食べていなかったり、教室にパンを買ってくる子ども、夕飯も一人で食べることがある子どもなど、さまざまな子どもがいます。ボランティアスタッフは、それがわかっているし、気になっていますが、今はおやつを出すくらいしかできていません。

##### ②生活経験の少なさによる子どもの生活しづらさ

参加している子どもに、こんなエピソードがありました。夏休みに、小学校から横浜市のうち訪れたことのある区に印をつけるという宿題が出たそうです。でも、その子どもは、神奈川区と西区にしか行ったことがない。また、ある中学生は、「美術館に行ってみよう」という宿題が出たときに、生活の中で体験的なことがほとんどなく、美術館の場所さえ分からなかったため、ボランティアと一緒に美術館に行ったとのこと。子どもたちの多くが、学校と家と親の働く場くらいしか知らないと思います。

宿題ができなかった子どもの寂しさもありますが、エピソードのなかで、スタッフはこうした経験の少なさが将来に夢を持つことなども阻むのではと感じました。もっと様々な体験を子どもに提供することも考える必要があると思うのと同時に、子どもとの対話の中で、少しでも補えればと考えています。

### II 保護者のサポート



保護者にも地域とのつながりを

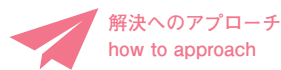
保護者会を開催して、交流を進めるとともに、相談事にも乗るようにしています。

国際教室のある学校も個別の子どもにしっかりかかわる時間が不足しているし、外国籍の子どもが少数の学校は、国際教室がないのでますます個別の生徒、まして、保護者への支援は届かないでしょう。保護者も地域とつながる機会がなく、孤立し、必要な情報さえ得られないことも多いはず。また、なかなか自ら自分の事を語るという機会が少なく、それが地域と繋がりにくくしている場合もあります。今年の保護者会では、それぞれの国のお正月のようすを話してもらい、その家族を理解してもらおうきっかけとなり和やかな時間を過ごすことができました。

## 課題2 役割の設定と運営

組織内共有

### I ボランティアの役割



子ども達との信頼関係を創れることを第一に

#### 具 体 策

##### ①担当制を決めたマンツーマンでの対応

友ゆうスペースは、現在40名のボランティアが登録しています。年代は高校生から80歳代まで幅広く、資格は特に必要としていません。子どもと楽しく勉強できればOKです。時間もできる範囲で手伝っていただければ良いことにしています。基本はマンツーマンで対応し、なるべくそれぞれの子どもには同じボランティアがついて、関係性が作れるよう配慮しています。



はーと友教室



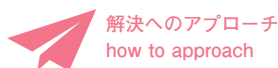
学習はマンツーマンで

## ②配慮の必要な子どもに適切な対応を

現在、区内3か所で学習支援をおこなっていますが、それぞれの教室にコーディネーターを配置し、その日の参加する子どもとボランティアの配置を考えています。

年1回の総会のほか、全体での定例会は年3～4回実施し、毎回、終了後に振り返りをして、気になる子どもの状況や課題について共有しています。特に、課題のある家庭の状況については、子どもへの配慮を適切に行うために、担当スタッフの間で共有しています。

## II 組織整備と3つの教室に分かれた情報共有法



### 組織体制の整備をしました

小さな組織ですが、3か所の教室を現在運営しています。これを実現するには、役割の明確化とその役割を果たすキーパーソンを決定する必要がありました。また、定期的な会議の開催も決めています。区内で外国籍の子どもの多い地域が他にもあり、教室の運営ができないかと要望を受けたことがあります。現時点では、3教室を同時に運営できている状況です。

### 具体策

#### ①3つの教室の責任者に代表・副代表・事務局を配置

3つの教室を運営していくためには、場を提供して頂いている学校や関係機関との調整が必要になります。また、ボランティアの確認や、参加の子どもの把握なども行わなければなりません。そのため、それぞれの会場に責任者が必要になり、3名の責任者を配置しました。また、これらの責任者は、基本的には毎回ボランティアが、担当の子どもに対応することになっているので、そういったコーディネートもしています。

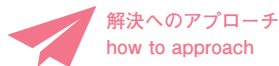
#### ②責任者会議の開催

日常的に、3名の責任者は個々の教室、また全体の教室の状況を把握するように努めています。年一回の総会の他、年に3回～4回定例会議を開き、各教室の運営上の課題や気

になる子どもの対応など共有するようにしています。

## 課題3 資金と場の確保

### I 安定的な運営



### 安定的な運営のための財源の確保と外部協力の必要性

### 具体策

#### ①ボランティア自身が納める会費が主な財源

現在の運営は区社協の助成金9万円/年と、ボランティアが納める1000円/年の会費(高校生500円/年)が運営資金の全てです。ボランティアの中には、バス等を利用して活動している人もいますが、交通費の支給はできません。イベントの経費としてはロータリークラブの助成金を当てています。また、おてらおやつクラブさんからのお菓子をいただいています。

#### ②場の継続使用のために続ける努力

小学校とは毎年2月に次年度のお願いをして継続できるようにしています。神大寺教室は地区センターとの共催事業のため、場所は確保されています。神奈川区保健・医療・福祉複合施設「はーと友」では、事務局が6か月前に予約を取って利用をしています。最近は使用する団体も増え、現在は毎週使っていますが、利用者連絡会で同じ団体の利用を指摘する声もあり今後も継続して利用できるかが少し心配な状況です。責任をもって活動を続けていくには、資金もですが、場は本当に重要です。

理想は常設の拠点があれば一番良いと思います。ラウンジがほしいです。立派な施設でなくてもどこかの施設の一部屋でも使えないかと思っています。地域に理解して頂く努力を続けていかなければと思っています。



今年の書初め大会

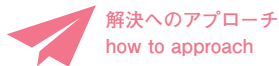


多文化の作品が完成

## 課題4

### 利用者・担い手の確保と対応

#### I 更に求められる支援の必要な子どもの発見と教室利用の促進



解決へのアプローチ  
how to approach

#### 広報ツールを活用した支援の必要な子どもや家庭への活動周知

神奈川県国際協力ネットワークから独立した「神奈川県に多文化共生をすすめる会」が神奈川県子育て支援拠点「かなーちえ」と協力して1冊のファイルにまとめた外国につながる親子に向けての地域情報を、神奈川県内の小中各学校で子どもや保護者への対応、相談、情報提供に活用してもらうよう配布・更新しています。そこに友ゆうスペースも紹介されています。しかし支援を必要とする子どもにきちんと情報が届いているかわかりませんし、教室から遠い地域の子どものみには対応できていないのが現状です。

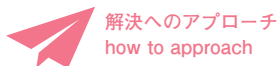
#### 社協の協力によってボランティアが参画

ボランティアには幅広い年代の方がいます。比較的年齢の高い方が多く、子どもにとってはおばあちゃん、おじいちゃんに勉強を見てもらい一緒に遊んでもらっている感じです。区社協のボランティアセンターが積極的にボランティアを紹介してくれています。神奈川県区の広報にも載ったので3名新たなボランティアが加わりました。

## 課題5

### 協力ネットワーク

#### I 福祉関係機関・福祉関係者とのつながり



解決へのアプローチ  
how to approach

#### 区社協とのつながり、主任児童員とのつながりで子どもの情報を得る

区社協で年1回、主任児童委員と子ども食堂や学習支援、居場所などの団体の情報交換会があり、そこでつながった主任児童委員と気になる子どもの情報共有をしています。

先日以前、友ゆうスペースに通っていて気になっている中3の女の子が、定時制の高校を受験する気持ちになっていることを主任児童委員さんから聞き、安心したところです。

#### 地域の社会資源を活かして子どもたちの生活しづらさを支える

友ゆうスペースの対象は小学生までですが、中学に進学した子どもも何人か参加しています。ここでは中学生の進学指導までは自信がないので、中学生には県民サポートセンターで活動している他の団体や他区の国際交流ラウンジを紹介しています。国際教室の先生や国際教室のない小学校では、児童専任の先生とは連絡を取っています。小学校内教室では、担任の先生も時々来ていただいているのですが、もっと連携ができて、様子を観て頂けるようになったらと願っています。

#### 取材を終えて

##### ■外国籍の子どもへの日本語支援について

- ・来日直後の母語支援・日本語支援が非常に脆弱なこと
- ・生活言語ができていると学習言語もできるかのような誤解が教育現場にあること
- ・社会保障でも担うべき、日本語指導をボランティアに頼っていること

##### ■居場所の必要性

- ・多様な人との関係性を持つために
- ・不足する生活経験を補える場として
- ・徒歩圏内で気軽に行ける場として

##### ■必要な居場所を社会で守っていくためには

- ・行政の手助け（財政的・人材的）

友ゆうスペースに限らず、今回の取材団体は、一様に、社会的な課題を発見して居場所を創り、更に、その運営を続ける中で新たな課題を発見し、それを仲間と共に如何に解決できるか考え行動していました。

ここで、語られた内容は、この先、個々の団体のみで解決するのではなく、社会全体の課題として捉えるべきことと思います。